vol.15　ドリアンスケールの使い方について　～その 1～

では、vol.15、始めていきましょう。

今回から、ドリアンスケールについて学んでいきます。

リディアンの時にもちらっと出てきましたが、同じ調性の中に存在する、リディアンとドリアンは特徴音が一致していましたね。

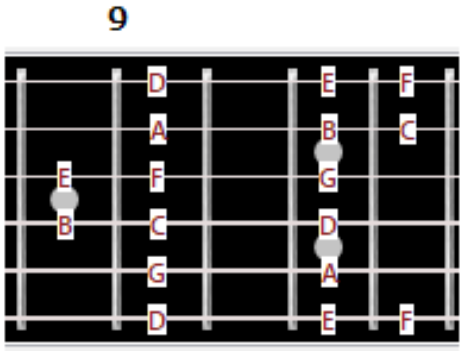
例えば、C キー内に存在する F リディアンと D ドリアンは、どちらも特徴音が B 音です。

・F リディアンの構成音と特徴音(赤字)
F(tonic)、G(M2nd)、A(M3rd)、B(♯4th)、C(P5th)、D(M6th)、E(m7th)

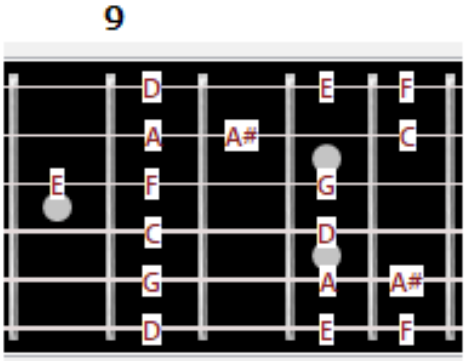
・D ドリアンの構成音と特徴音(赤字)
D(tonic)、E(M2nd)、F(m3rd)、G(P4th)、A(P5th)、B(M6th)、C(m7th)、

次に、ドリアンの代表的なスケールポジションと、マイナー系スケールの基準である、ナチュラルマイナー(エオリアン)を見比べてみましょう。

・D ドリアンスケール、重要ポジション



・D ナチュラルマイナー(エオリアン)スケール、重要ポジション



(※A♯音は B ♭に読みかえて下さい)

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

以前も解説しましたが、ドリアンとナチュラルマイナーを比べてみると、6 度の音が違いますね。

・D ドリアンの構成音と特徴音(赤字)
D(tonic)、E(M2nd)、F(m3rd)、G(P4th)、A(P5th)、B(M6th)、C(m7th)、

・D ナチュラルマイナーの構成音と特徴音(赤字)
D(tonic)、E(M2nd)、F(m3rd)、G(P4th)、A(P5th)、B ♭(m6th)、C(m7th)、

この様にドリアンの構成音を見る時、6 度の音を「M6th」では無く「♮6th(ナチュラルシックス)」としている解説もありますが、指している音自体は同じです。

♮6th の場合は、マイナー系の基準スケールであるナチュラルマイナーの 6 度(m6th or ♭6th)を、「(半音下がっているものを)元に戻す」と言う解釈からそうされている様です。

続いて、コードの方を見ていきましょう。

D ドリアンスケールから 3 度積みで構成されるコードは「Dm7」ですね。

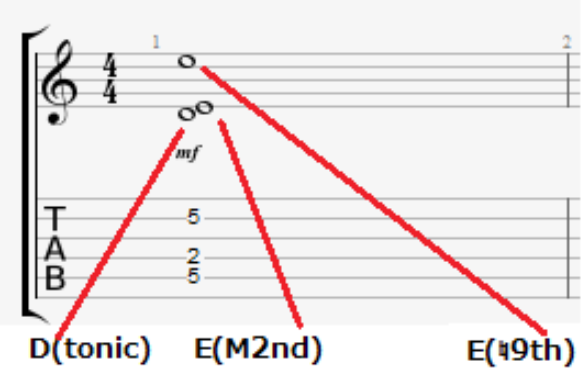
・D ドリアンの構成音
D(tonic)、E(M2nd)、F(m3rd)、G(P4th)、A(P5th)、B(M6th)、C(m7th)、⇒Dm7

ここに、通常、テンションとしては 9th(M2nd)と 11th(P4th)が乗せられるのですが、注意しなければならないのは 13th(M6th)ですね。

ちなみに、音名が同じになる、低いインターバルの音とテンション(例えば M2nd と 9th)を同じものの様に表記していますが、厳密には両者は違うものとして区別します。

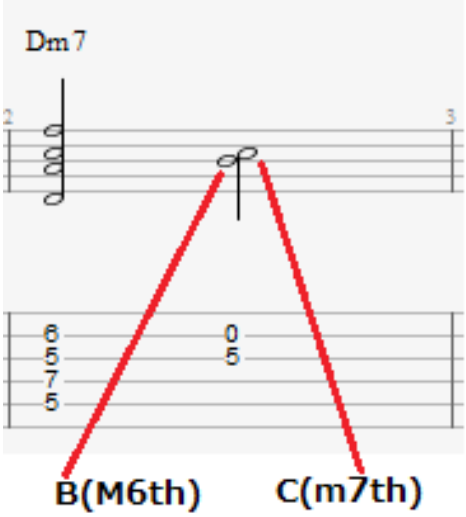
ただ、ギター単体で見た場合、楽器の構造上、区別してられない事が多いですし、最終的には楽曲の全パートとの兼ね合いになるので、解説のしやすさを重視して、ここではこの様に記しています。(※実際の演奏をする時は気を付けましょう)

※D 音をトニックに、M2nd と 9th を正確に見る



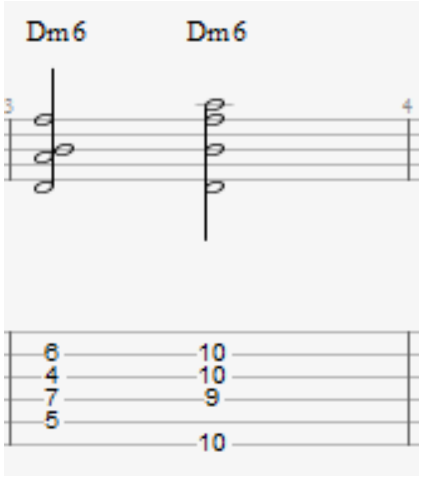
Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

で、問題の 13th なのですが、まず、この音を 6 度(M6th or ♮6th)として捉えた場合、普通に Dm7 コードに入れると、m7th と半音でぶつかりますね。



なので普通は Dm7 に M6th は挿入しません。

逆に、コードの方を、Dm7 から m7th を抜いて、Dm に M6th を加えた Dm6 にした場合、m7th の方が邪魔になるので 7 度を挿入しないようにします。



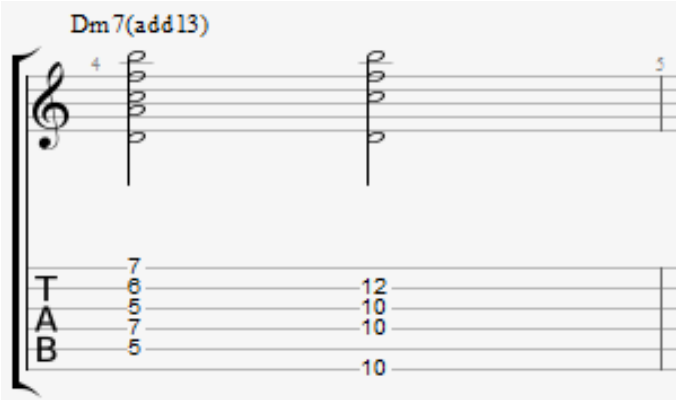
この様に、D ドリアンスケールの特徴音は M6th ですが、和声(コード)的な観点からは、アボイド・ノートが「M6th か m7th のどちらか」に変化しますので覚えておきましょう。

そして、これらの知識を基本にして、13th の扱いを考えていくと、13th のオクターブ下の M6th の時は、m7th に干渉するので使いづらいわけですが、オクターブ上の 13th ならば、m7th と離れているので、同時に鳴らしても良いのではないか？という気になってきます。

で、実際、ギターで鳴らしてみると、この様になります。

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

※Dm7(add13)



先ほどの 6 度で鳴らした時は、音が濁っていたものですが、こうすると違和感が無くなりますね。

【モード奏法 vol.10】で、リディアンを例にして、鍵盤などで音の距離を可視化してみましたが、コードネームだけを見て判断するのではなく、実際に鳴っている音の距離を考える事が大事です。

ただ、上に挙げた、Dm7(add13)もしくは Dm7(13)と言うコードは、普通は 6 度(音名自体は 13th と同じ)がアボイドになるので、あまり見ないと思います。

上の譜例は、ギター単体で見たら問題はありませんが、仮に、楽曲にギターより上(もしくは同等)の音域を演奏しているパートがあった場合、そちらの 7 度などと干渉してしまう事もありますので。

いつもの事ですが、最終的には、全体との兼ね合いで判断していく事になるので、その辺りは常に気を付けておきましょう。

それでは最後に、簡単なドリアンの譜例を弾いて終わりにしましょう。

リディアンの時は、最初はコードバッキングだったので、今回はドリアンの単音リフのパターンです。

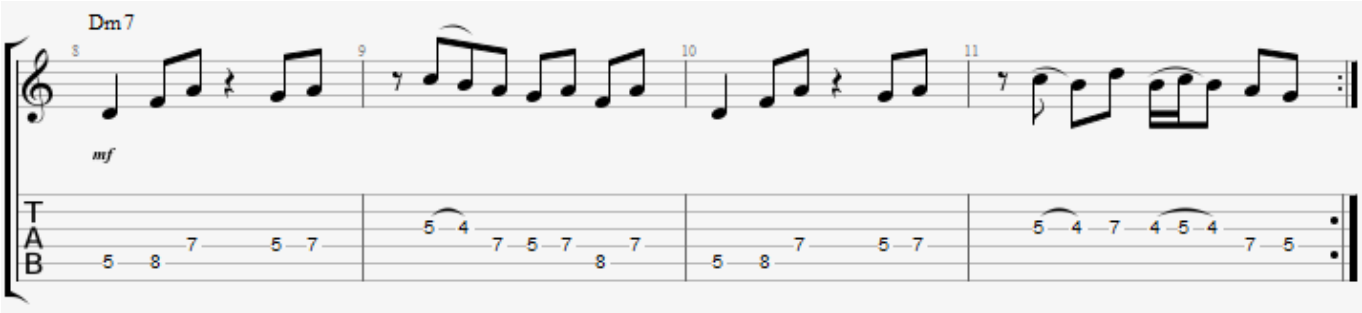
想定テンポは BPM130 位、弾き方としては、譜例には細かく記してありませんが、全体的に軽くブリッジミュートをかけて弾きます。

どちらかと言えば、5&4 弦よりも、3 弦はミュートを離し気味で、フィルっぽい部分を際立たせるように弾くことを想定しています。

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

このリフをバッキングにソロの練習も出来るので、可能であれば録音するなどして、メロディーも弾いてみて下さい。

譜例、D ドリアン、単音リフ



では、また次回に続きます。

ありがとうございました。

大沼

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved